



# NPO通信

## 2013年度からの消費税徴収について

私達は普段の生活の中で、消費税を支払っています。この消費税が先の国会で税率アップし、社会福祉に重点的配分される事が決まりました。

さて、NPO 法人かわさき市民アカデミーでも財団時代から継続して毎年消費税を納めてきています。法人である以上 NPO であっても消費税を納めるのは義務となっています。これまで受講料などに関して消費税云々に関する話をしてきませんでした。これは出来る限り皆さまに負担をかけずに、消費税の支払いが出来る収支を継続する努力がなされてきたからでした。

NPO では2010年度からの自主運営以来、受講生の皆さまの協力による「世話人制度による講座運営」はもとより、受講料や謝金の見直し、エクセレント講座に代表される新規講座の開設、広報活動強化や新規受講申込システム開発による受講生数の拡大などによる受講料収入の増加、更に支出を抑える事に注力し、収支バランスをとってきました。

しかし、「市民が中心となって自主運営をする」というアカデミーの基本方針を実現するための「世話人制度による講座運営」に関して制度疲労が見受けられるようになってきています。そこで2013年度以降事務局員の増員を図り、全体運営の柔軟性を高める事と「事務局中心の講座運営」の可能性を模索したいと考えています。更に、世代的、経済環境的に受講生の増加が望めない、優先的会場利用の制限もあり得る状況下でますます収入増加が期待出来ない環境になってきています。

このような状況に鑑み、これまでの受講料の中に消費税を含める徴収方法から、受講料と消費税を区分し徴収する仕組みに変更する事で、アカデミーの継続・存続を図ってゆきたいと思っています。

具体的には、2013年度からの受講料及び1年/2年会員会費に関し、消費税率を乗せた金額とさせて戴きます。例えば、受講料（税込）2年会員 8,400 円、1年会員 9,450 円、聴講生 12,600 円となります。今後消費税率がアップされても、柔軟な仕組みとなるようになります。税率変更時、例えば2年会員であれば、8%（2014年4月より）では8,640 円、10%（2015年10月より）では、8,800 円となります。

NPO では今後も収入増や支出減に関する施策を展開し、極力受講生の皆さまへの負担軽減を図るよう努力を続けてまいります。

以上、諸般の状況をご理解戴き、かわさき市民アカデミーの継続・存続にお力添え戴けますようお願い致します。

# 川崎市文化賞 授賞式

和田あき子学長が、平成5年の市民アカデミー創設以来、今日に至るまで20年間、「市民による市民のためのアカデミー」の組織作りから運営に取り組んできた功績により「川崎市文化賞」を受賞されました。授賞式は市長を始めとした多数の方々の出席のもと、11月8日（木）国際交流センターでおこなわれました。贈呈式、記念写真撮影、祝賀会が持たれ、和田先生が「かわさき市民アカデミー」の意義を強調するスピーチをされ、盛会のうちに終了いたしました。



## 理事会報告

（詳細は議事録と資料をご覧ください。事務局に常備してあります）。

「2012年度11月理事会」2012年11月6日 15:30～18:30

審議事項：10件、報告事項：15件

### 主な審議事項

- ① 処務規程について
- ② システム改善計画について
- ③ 消費税徴収に関する件について
- ④ 事務局職員の講座（WS）運営に関する基準の改訂について
- ⑤ アカデミー学習システムについて
- ⑥ 第2次中期経営計画作成委員会の役割について

### 主な報告事項

- ① ‘12フェスタの準備状況等について
- ② 旧音楽WS7問題進捗状況について
- ③ 会議の公開規程について
- ④ 20周年記念事業実行委員会の委員について
- ⑤ 三者会議の報告について
- ⑥ 運営代表世話人会議の開催について
- ⑦ 理事、受講生等オールNPO構成員相互の言動に関する基本姿勢について

NPO総会での提案事項「事務局中心の運営」を進めるのに必要な規程の改定や費用負担に関する検討を行うと共に理事の言動に関する基本姿勢についても真剣な話し合いを行いました。

## 「本の世界」

# 『やまと言葉で哲学する』 竹内 整一 春秋社

「人間学」コーディネーターの竹内先生が『やまと言葉で哲学する』と題する注目の本を出版なさいました。私たちがモノを感じたり、考えたりする場合には日本語を用いて行います。日本語はやまと言葉と漢字、さらには近代以降、西欧の概念を新しい漢字やカタカナで表記し、受け入れてきました。現代の私たちはこのような「雑種の複合体」を巧みに使い分けて生活しています。

しかし、「やまと言葉」は私たちの感情の機微を伝える言語なのをたいして、「哲学」は明晰な論理で問題の本質を解明してゆくイメージがあります。この二つはどのように結びつくのでしょうか。一見して奇異な感を抱きますが、著者の意図は、改めてやまと言葉の成り立ちや言葉遣いのありかた、そこに含まれている発想のあり方を検討することにより、「漢語や翻訳語の抽象概念やカタカナ表記語に覆われてしまい今まではあまり意識されることもなくなってしまった、他者や事物への、具体的、より直接的な結びつきや関わり方を確かめること、そうすることにより、私たちの生き方・考え方を見直してみようとする点にあります。本著は三部から構成されています。内容を概観します。

### 第一部：日本人とやまと言葉

第一部では分析のキー概念である「みずから」と「おのずから」およびそれを結び合わせる「あわい」の考察から始まります。日本語では、「みずから」と「おのずから」とは、ともに「自（ずか）ら」であり、「みずから」なしたことと、「おのずから」成ったこととが別事ではないとの理解が働いています。私たちはしばしば「今度、結婚する事になりました」というような言い方をしますが、そうした表現には「みずから」の意志や努力で決断・実行したことであっても、一方では「おのずから」の働きでそうなったのだと受け止めていることを含意しています。このような考え方を親鸞の思想や日本の古典に記載された用例から論じられ、一見異なる概念を「あわい」という微妙な言葉で折り合いを付けてゆきます。

### 第二部：やまと言葉で哲学する

第二部は本の題名になっているように、この本の中心で、普段よくつかう「やまと言葉」を一つずつ取り上げ、様々な用例から言葉に含まれている私たちの深層をなす考え方・感じ方が論じられます。取り上げられる言葉は、「ありがたい」「めでたい（いわう・しあわせ）」「あう（ちぎり）」「あいする（ほれる・こいする・すく・したう）」「しんずる」「たのしい」「おもしろい」「あそぶ」「すむ」「なつかしい」「いのち」「たましい」「いたむ・とむらう」「さようなら」「かなしい」「くるしい（くるう）」「あわれ」「うつる」「はかない」「どうせ」「いっそ・せめて」「ゆめ」「あわい」「はやい」「あきらめる」「あやまる（もうしわけない・すまない）」「はずかしい」「やさしい」「おどろく」「かんがえる・まなぶ」「におう・かおる」など、普段何気なくつかっている言葉ばかりです。「しあわせは「仕会わす」から出来た、「信ずる」と「当てる」は違う、「すむ」は、澄む・済む・住むこと、「楽しい」と「楽」は違う、「懐かしい」は「なつく」の形容詞、「かなしい」は「…しかねる」こと、「うつる」は、移る・映る・写ること、「はやい」は、はやい・はやすと同根、「諦める」は明らめること、「申し訳ない」とは、apologize しないこと、「恥づ」とは外れること、等々、その中に私たちのものの考え方の基本構造を探り当ててゆく鋭さと手際よさに触れると思わずなるほどと感心させられます。

### 第三部：無常ということ—やまと言葉の感受性を手がかりに考える

東日本大震災を踏まえて近代科学技術の基本的な発想は、ものごとを「はかり」にかけて計算し数値化し、そのことによって、人生や世の中を、さらに便利に、さらに安全に営もうとするところにあるとの観点から文明のあり方が論ぜられ、これと対置して「無常」のあり方が論ぜられています。「無常」は馴染み深い言葉であり、しばしば宿命論の色彩を帯びがちですが、ここでは「無常」の持つ肯定的な部分が強調されています。私たちの無常観や「はかなさ」を感じ取る感受性には、そこに同時に何かしら安定した秩序を見出してゆく傾向があります。それはそうした変化がそれだけでむなしく移ろうのではなく、その中でも、より大きな自然のテンポ・リズムを重ねて感じ取るという感じ方なのです。このように無常観が大きな「自然のいのちのリズム」と重ねて感じ取られるとき、その無常観は、「己の力や意志をも包んで、すべて興るのも亡びるのも、生きるのも死ぬのも、この大きなリズムの一節である」という「諦念」に繋がってゆきます。

## コーディネーターからのメッセージ

### 新講座「新しい科学の世界」 柴田 鉄治

◇火曜日 10:30~12:00 ◇生涯学習プラザ

かわさき市民アカデミーの名物講座の一つとして長くつづいてきた「暮らしの中の科学」が幕を閉じるのをきっかけに、新しい講座を考えよ、という命令が私に降ってきた。そこで、「環境とみどり」を担当されている太田猛彦先生をはじめ、これまで「暮らしの中の科学」を担当されてきた理事や世話人、受講生の代表といった方々と話し合った結果、まったく新しい講座を立ち上げようということになった。

まず、私たちの生活は、さまざまな科学や技術に囲まれて暮らしているのだから、広い意味で科学や技術を講座の中心に据えようという方針を決めた。ただ、暮らしの中の科学とは限定せず、もっと幅広く、さまざまな分野に広げていくことを考えた。

といっても、ほかに「いのちの科学」や「環境とみどり」といった講座もあるのだから、医学や健康、生物や生命科学にまで広げると、それらの講座とぶつかってしまう恐れがある。そうすると、分野は生物系を除いた理学、工学といったところになろう。

受講生から寄せられたアンケートによると、希望する講義として宇宙科学や地球科学といった分野が多く挙げられていたが、そういうものは十分に取り入れられるわけである。

次に、「暮らしの中の科学」では、午前の講義と午後のワークショップが連続して組まれていたが、新講座ではワークショップを切り離し、科学実験のようなものは今後、別枠で新たに考えるとして、見学会だけは一部残したいということになった。

これで大体の枠組みが決まったが、講座の名前をどうするか、なかなか名案が浮かばず、仮の名前と呼んでいた「新しい科学の世界」をそのまま新講座名とすることにしたのである。

ここから私が具体的な講座づくりに着手したが、真っ先に考えたのは12回のうち2回を見学会にあてるとして、見学先をどこにするか、ということだった。新しい建造物がいいたろうと、スカイツリーや新しい東京駅を考え、当たってみたら両方とも「講演・見学依頼が殺到しているので」と断られてしまい、先延ばしすることにした。

結局、工学関係は、これから原発をどうするかを含めたエネルギー問題と川崎市の地下深くを縦断する予定のリニア新幹線の問題だけとなり、あとは宇宙や地球の科学など理学関係が多くなった。

見学先も、オーロラの動く映像や隕石の実物が見られる国立極地研の「南極北極科学館」と、スーパーコンピューターの使い方としては世界の最先端をゆく海洋研究開発機構の「地球シミュレーター」の2カ所と決まり、いずれも講義をした講師が案内役も務めてくれることになったのである。ぜひ、大勢の受講生が来てくれるようにと願っている。

#### 『編集後記』 朝ぼらけ有明の月と見るまでに 吉野の里にふれる白雪

師走に入り、初雪の便りが聞かれる季節になりました。今回は消費税の外税化を取り上げました。講座・ワークショップ開始前でも趣旨の説明を続け、受講生の皆様に納得いただけるように努めて参ります。ご協力をお願い申し上げます。

編集責任者：折居 晃一、田辺 初子、高橋 富夫、原 宏、西山 拓